

# 開かれた大学

松山 薫



について、女性が感じている不快感や危惧感は、世間一般やお上が考えているよりずっと深刻であるということ、強く認識される必要がある。ある物事のしわ寄せが、特定のカテゴリー

庄内酒田の地に東北公益文科大学が開学して、二カ月あまりが過ぎた。研究室の窓から見える砂丘の緩斜面の緑はだいぶ濃くなつた。時折キジ、ヒバリ、トビなどの声が響く、のどかな環境である。

大学そのものも、全体として明るく前向きな雰囲気にも包まれている。新設大学であるから当然かもしれないが、それ以上に、地域の方々の期待・関心の高さや、「新しい大学を作り上げる」ことへのスタッフの熱意、さらには「世のため人のための学問」とされる「公益学」という新しい学問の性格などにもよるのだろう。私自身、「大学ができる」というそうそう居合わせることのない出来事に、教員として立ちあうことができたのは、大変な幸運だと思っている。

さて、当大学は、地域に開かれた大学であることを一つのモットーとしている。道路と大学施設の間には壁が無く、食堂も売店も図書館も一般に開放されている。土、日曜ともなると、大学食堂は近隣のご家族連れなどのグループであふれ、子供の歓声が響いてほとんどファミリーレストランと化している。老若男女を問わず大学に関心を持ち、親しんでいただけるのはありがたいことである。

ただ、「開かれた大学」という言葉に対して、気になる点がないわけではない。折しも、大阪府の小学校で侵入者による児童・教員殺傷事件が起こり、「地域に開かれた学校」と表裏一体の弱点が社会問題化している。当大学では、開くところは盛大に開く一方で閉じる所は厳重に閉じているようであるが、大学関係者および来訪者の安全確保という課題は、今後も検討を重ねる余地があろう。

また、当大学には、一般利用者がインターネットを利用できる場所があるのだが、現在一部の利用者のモラルに反する行為が問題になってきている。大学としても、無料無料インターネットカフェを提供する場ではないので、この文章が活字になるころには、何らかの対応策がとられていくはずである。ただ、ことインターネットの世界においては往々にして性善説が成り立たないのはすでに周知の事実であつたわけで、このような事態は当然事前に予測されるべきものではなかったか。これは、セキュリティやモラルの面を後回しにしている昨今の世間のやみくも(?)なIT化のもとで、我々が大きな課題にしなければならぬ点である。特に、インターネットの負の側面が日々の生活に侵入してくること

に属する人間に集中しがちな場合、その問題は絶対に軽視されるべきではない。

インターネットの情報の質や利用法全般に関しては、前号のこの欄(『IT革命』ってかあ?)で秋山周三さんがユーモアと風刺たっぷりに、なおかつ極めて正当な疑問を投げかけている。やはり現在のインターネットの無批判な普及をめぐる状況は相当に問題を含んでいる。今回当大学でみられたような事態も大きくみればその一端であり、個々の利用者の判断を信頼するといったレベルで済む問題ではないように思われる。

「開かれた大学」も「世のため人のため」も、なべて異を唱え難い、明るく健康的で希望に満ちた概念である。ただし、前向きであるだけでは負の部分への対策がどうしても後手に回りがちである。理不尽なほころびが発生したり、特定の人間に不利益を与えないよう周到な備えをすることが不可欠であること、すなわち一口に「公益」といってもその背後にはさまざまな要素が絡み合い、複雑な調整が必要であることを、入学した学生諸君は「世の中の役に立ちたい」という純粋な気持ちの土台の上に、学んでいってもらいたい。

(東北公益文科大学講師・鶴岡市)